

対談「無神論の黄昏とアジア神学の将来」

アリスター・マクグラス

森本あんり

森本（以下、森）：まず、今日ご一緒いただけることを感謝いたします。現代神学の巨人と2時間も独占的な対談をするという機会ですから、わたしがどれほど嬉しく思っているか、たぶんご理解いただけないくらいだと思います。

マクグラス（以下、マ）：ご親切な言葉をありがとうございます。

森：わたしはピューリタン神学を勉強しましたが、ピューリタン神学においては、アングリカンというのはカトリックよりもちょっとましなくらいの悪玉なのです(笑)。でも今日はあなたを大歓迎いたします。さて、今日の対談の構成ですが、一応二つの部分に分けてみようと思います。最初はあなたが最近非常に熱心に続けておられる無神論との討論について、もう一つはアジアと日本の神学の将来について、お伺いしようと思います。第一部ではだいたい大きな質問が5つくらい、第二部では3つくらいを考えております。

マ：それで結構です。

1. なぜ無神論者と対話するか

森：では無神論の方から始めましょうか。インターネットを見ますと、あなたと無神論者との討論がいくつも載っていますね。わたしは、ご同僚のリチャード・ドーキンズ教授(『利己的な遺伝子』など多くの著書があるオックスフォード大学の生物学者)との討論、それにピーター・アトキン

ズ教授(エディンバラ大学の化学者)との討論などを興味深く拝見しました。本を読むのはいつでもできますが、ウェブ上の討論は、本より生き生きしていて、いちばん現代に近い議論を知ることができますので、これを取り上げることにいたしました。

マ：その通りですね。

森：最初にわたしの印象を申し上げますと、あなたはとても勇気がおありです。ご自身をまな板に載せ、無神論者からの攻撃に晒しているという意味です。ドーキンズ教授は、著書の中ではかなり攻撃的ですが、少なくともあの討論では、まずまず紳士的だし、敬意をもってあなたに接しています。他方、アトキンズ教授は、発言に敵意が感じられ、ときに嘲りにも近い皮肉を感じることもあります。

マ：たしかに彼はそうでしたね。

森：討論の終わりでは、この討論を聞きにきた人々はどちらにせよ自分の意見を固めており、結局考えを変える人はいなかっただろう、と言っていますし、途中のひとこまでは、「自分が正しい時に、どうして傲慢になってはいけないのだ」と言い放っています。

マ：ああ、そこはよく覚えています。

森：こういう人々に対して、あなたは勇猛果敢に討論を続けておられる。ウェブ上では、さらに討論以後も賛否両論さまざまな意見が寄せられています。そこで、わたしの最初の質問は、どうしてあなたは無神論者との討論にそれほど熱心なのか、ということです。これは、たぶんあなたの自伝的な紹介にもなるのではないか、と思ってお尋ねします。

マ：そうですね、わたしが現代の無神論と対話する理由の一つは、無神論の批判に対してはきちんと答えることができる、ということの人々に示したいからです。もちろん、わたしよりもずっと上手に論ずることができる人もいるでしょう。でも多くの場合、神学者たちは討論をすることに準備ができていないように思われます。わたしの場合、自分自身が(かつて分子生物学者として)無神論者だったから、その準備ができていて、と申し

上げることができます。

森：ちょっと待ってください、アトキンズ教授はどうやら、あなたが以前は無神論者だったということを信じてくれないようですが。

マ：ええ、でも彼はわたしの言葉を信じなければなりません。信じること一般が彼には苦手だったとしてもです(笑)。わたしのことについては、何と言ってもわたしは彼よりもよく知っていますからね。

森：それはそうですね。

マ：そういうわけでわたしは、無神論の批判がどこから来るか、そしてそれにどう答えたらよいかについて、他の人よりもよく知っているのです。その批判は、かつての自分がした批判だからです。ただし、無神論との討論は重要ですが、それは彼らを回心させることだけを目的としているのではありません。あなたもご覧になった通り、アトキンズ教授は非常にドグマチックで、自分の考えに固執しています。でも、あの討論を聞きに来た人々の中には、そうでない人々もいます。実のところ、わたしはそういう人々に語りかけているのです。

森：なるほど。

マ：彼らのうちには、知的な興味をもっている人々、ドーキンズ教授らの本を読んで、世界は本当にそんなに単純なのか、と訝っている人々がいます。もちろんそんなはずはありません。そういう人々に語りかける唯一の方法が、討論という形式なのです。わたしは、ドーキンズやアトキンズ以外にも、ワシントンDCでクリストファー・ヒッチنز、それにダニエル・デネットとも討論を交わしました。

森：ええ、それらも拝見しました。彼らの質問は、わたしが学生たちから受ける質問とほとんど同じです。わたしはリベラルアーツの大学で教えていますが、学生たちは無神論ないし無宗教からの質問をぶつけてきます。実はこの対談でも、わたしが念頭に置いているのは、そういう現代日本の若者たちです。彼らに、キリスト教信仰が知的にも誠実な生き方であり得ることを示したい、と願っています。

マ：それはもっともですね。

森：あなたは、キリスト教信仰が道理にかなったものである、と言われてます。もちろん、それには当然の限界がありますが、少なくともあるところまでは、科学の答えだけで構成されている世界理解よりも合理的である、とも言われます。わたしのおります小さなキリスト教大学でも、学生の9割方は非キリスト教徒ですが、「キリスト教概論」という授業があります。あなたの近著の題名と同じですね。その学生たちに語りかけたいと思っています。

2. 無神論の背景にあるもの

森：二つめの質問は、あなたがドーキンズ教授との討論の最後になされた質問についてです。あなたは、彼の無神論の背後には、抑圧され覆い隠された「怒り」があるのではないかと尋ねられました。彼はそれを肯定し、なぜ自分がキリスト教やキリスト教徒について怒っているのか、3つほど理由を挙げています。たしか第一に、人間は理性の力を与えられているのに、キリスト教はその能力を使わせないようにしている。考えることをやめ、トランプの切り札を出すようにして、「これを信じろ」と迫るからだ、というものでした。こういう考えに彼は反発しています。第二の理由は、悪の問題です。災害が人々を襲う時、神はある人を救い、他の人を滅ぼすことに決めているように見える。どうして神はそんな不条理な選択をするのか、ということだろうと思います。そして第三には、宗教は非道徳的だ、という批判です。これはキリスト教に限ったことではありませんが、宗教は子どもたちを洗脳して、自殺テロ攻撃をさせたりする。こういうことに対して、自分は憤っているのだ、と答えています。さて、わたしのあなたへの質問は、なぜあなたがあの質問をしたのか、ということなのです。もしかすると、あなたはこう言いたかったのではないかと。「人が無神論者となる理由には、怒りという感情の問題が伏在している。無神論は、しばしば

その持ち主が主張するように、科学的で客観的な結論ではけっしてなく、感情的な動機をもっている。ちょうど信仰がそうであるように、無神論もまた人間の個人的で実存的な経験に根ざしたものである。」

マ：そうですね。ちょっと説明しましょう。近年の心理学的な研究には、神への怒りという感情を論じたものが多くあります。これは面白い現象ですね。だって、人々は神に怒っているというのですが、もし神が存在しないのなら、どうしてその存在しない神に怒りを覚えるのでしょうか。わたしがあの質問をした理由はとても簡単です。彼が科学者だからです。彼自身よく知っていることですが、科学においては、同じ一つの現象に複数の異なった説明のしかたがあります。それらのうちどれが最善の説明かを考えるのですが、それは怒りによって論じられることではありません。どれがよりよい説明であるかを考えるのであって、こちらの人々は愚かであちらの人々は賢い、ということではないのです。なぜドーキンズは、宇宙の起源については冷静な議論をするのに、神については怒りのカテゴリーで論じるのでしょうか。わたしの見たところでは、彼は自分で怒りたいから怒っているのです。

森：怒りたい？

マ：そうです。彼は宗教に怒っていたいのです。彼の知的な批判には、道徳的な色合いが含まれています。問題は、彼が自分の世界観にあまりに深くはまり込んでいるため、自分が批判するその宗教の「鏡像」になってしまっていることに気がつかない、というところにあります。自分に反対する者は、誤っており、悪なのだ、と決めつけていますが、これはまさに彼の批判するファンダメンタリストの立場とまったく同じです。結局われわれが論じているのは、「宗教」対「無神論」ではなく、世界観の違いなのです。世界観というのは、現実を解釈する方法なので、もともと手元にある証拠だけの議論を越える性格をもっています。ドーキンズですら、「無神論は証明できる」とは言いません。証明などあり得ないのです。ところが彼には、「神は存在しない」という根本前提があるので、「神を信ずる」とい

うのは正気の沙汰ではなく、惑わされているに違いない、とってしまうのです。それぞれが相手の世界観を尊重しつつ論じられればよいのですが。それでわたしは、彼のことを「無神論ファンダメンタリズム」と呼びます。自分の世界観に凝り固まって他人のそれを理解しようとしなない人は、ドグマチックになって相手を悪魔視します。それは真理を求めようとする人の態度ではなく、自分の立場を固守しようとする人の立場です。

森：なるほど。それはファンダメンタリスティックですね。

マ：もう一つわたしが困惑しているのは、彼が自然科学を悪用するそのやり方です。

森：悪用する？

マ：そうです。悪用しているのです。彼は科学を宗教に対する武器にしています。科学を自分の反宗教クルセードの同盟者に仕立て上げるのです。実のところ、科学は彼の立場を擁護してくれません。だから多くの科学者が憂えているのです。彼は科学について、とても誤った印象を与えています。

森：科学を自分の目的に仕えさせているわけですね。

マ：はい。でも科学はもっと謙虚です。

森：だからあなたは、彼のような人と討論をすることが大事だと考えているのですね。神学者としてばかりでなく、科学者としても。

マ：その通りです。怒れる無神論者は、実は怒る必要などまったくないのだ、とわたしは言いたいのです。キリスト教徒も、無神論者がした多くのことについて怒ることができるでしょう。ドーキンズはこういう事実に向き合おうとしません。彼は、たしかにそういうこともあったが、それらは無神論の名のもとに行われたのではない、と主張します。

森：ウェブ討論でもそう言っていますね。

マ：ははっきり言って申し訳ないが、無神論の歴史を見れば、彼の言っていることはまったく弁明のしようもありません。彼は科学についてはよく知っているでしょうが、哲学史についてはほとんど知りません。その無知

がここに表れています。

森：彼は、「無神論者の暴虐は偶発的で、無神論とは関係がない」と言っています。

マ：彼らに虐殺されたキリスト教徒たちにとっては、偶発的どころではありませんよ。レーニンの宗教論を読めば、宗教の抹殺、場合によっては宗教者の抹殺は、彼の主題的な任務に深く織り込まれていることがよくわかります。

3. 無神論と他宗教

森：さて、三つめの問いは、わたし自身の経験に基づくものです。だいぶ前のことですが、母校の神学校で講演をした時、他宗教を信じている人々には賢明に対応しなければならない、と話しました。とりわけ、仏教のお坊さんや熱心な信徒には、自分の信仰を証しするのはよいとしても、直接の伝道には十分に気配りをしなければならない、と申しました。ところが、会場にその神学校の学長がおられまして、わたしはさっそくたしなめられてしまいました。もちろん、かつてのわたしの先生ですので、わたしもみんなもそのやりとりを楽しんだのですが。彼が言うには、ここにはこれから卒業して全国の宣教地へと散らばってゆく神学生たちが集まっているのだから、彼らが仏教の盛んな土地に遣わされた時に伝道できなくなるような話をされては困る、ということでした。さて、そこでお伺いします。あなたが無神論者との討論に熱心なのは、他宗教の信者への宣教には慎重であるべきだからなのでしょう。たとえば、ホロコースト以後の今日、ユダヤ人に宣教をすることは、なかなか難しい倫理的な問題をはらむように思います。

マ：難しい問題ですね。まず、わたしはどのような信仰も尊重しなければならない、と思います。ついでに申し上げますと、無神論も一つの信仰なのです。

森：討論の中でもそうおっしゃっていましたね。

マ：もちろん、だからといってわたしは彼らに賛成するわけでもありませんし、彼らに伝道をしないわけでもありません。尊重です。相手を人間として尊重することこそ、相手の心の扉を開きます。この気持ちがなければ、こちらの言うことを聞いてもらうこともできません。たとえば、わたしがドーキンズやアトキンズと討論する時もそうです。彼らはわたしに無礼な時もあるでしょう。でもわたしは、敬意を欠かないようにしています。無礼さが相手の心にバリアを張ってしまうことがあるのを、よく知っているからです。キリスト教徒が尊大であったり、相手の言うことを聞こうとしなかったりしたのでは、いけません。それでも、自分の考えを相手に伝えることはできます。結局はやり方の問題でしょうね。戦闘的に、ドグマチックに、詭弁を弄しても、うまく行かないでしょう。相手の言葉に耳を傾け、相手が自分に挑戦する機会も与えてあげなければなりません。お互いの会話が長く続くとしても、それでよいのだと思います。実は、こういう態度は新約聖書にも記されています。アレオパゴスにおけるパウロの態度も、相手を尊重しつつ伝道をした実例と言えるでしょう。ですから、これから仏教や神道の信徒に伝道しようとする人々にも、同じように振る舞っていただきたいですね。ある人々には良い方法でも、別の人々には良くないかもしれない。それは、相手の心に橋を架けることですから。

森：そうですね。他宗教でなく無神論に焦点を当てているのは、彼らの心がいわば宗教的に空席だから、というわけではないのですね。

マ：いいえ違います。無神論はやっぱり信仰の一つだと思いますよ。それが現代ではもっともよく論じられているから、それを焦点にしているだけです。ただ、無神論との討論はもうすぐ終息に向かうと思います。そろそろ次のテーマに移るでしょうね。

森：え、そうですね。

マ：はい、たしかに現在とても声高に論じられている観がありますが、それを支える潮のような知的関心の高まりがありません。たぶんあと三年か

四年すると、今ほどの関心は払われなくなると思います。

森：ほんとうですか。もしそうだとすると、どうしてここ数年は無神論に関心が向いたのでしょうか。

マ：いくつか理由があると思います。特に9.11はその一つです。最近出版された本はみなそれに触れています。

森：「あの惨劇の間、神はどこにいたのか」という問いですか。

マ：いや、それもありますが、もっと多いのは、「それ見たことか、宗教がテロの原因だ、やっぱり宗教は悪だ」という議論です。

森：ああ、そちらですか。

マ：もちろん、これは根拠の薄弱な議論ですが、そのことも示さないといけません。もう一つは、アメリカをはじめ世界の各地で宗教が再興しているので、無神論はそれに対抗しなければならない、と感じているのです。面白いことに、こういう無神論の高まりは、西洋世界の公的場面における宗教の役割への反発なのです。お隣の韓国でも同じことが起きています。大統領がプロテスタントであることが議論を巻き起こしているのをご存じでしょう。でも、わたしは最近の無神論者の本をさんざん読んでみましたが、彼らの議論には新しいところがちっともないように思います。

森：わたしもそう感じています。

マ：唯一新しいのは、彼らの攻撃的なところですが(笑)。問題は、攻撃的だと反発も生まれる、ということでしょうね。しかし何と言っても、その議論に知的な活力がないので、昔ながらの批判を繰り返しているだけなのです。

森：それに、「これがキリスト教徒の考えだ」と彼らが言うことも、今のキリスト教徒の考えとはかけ離れていますね。

マ：そうなのです。

4. 科学的真理と「出会い」の真理

森：さて、四つめの質問は、いわば「宗教」という言葉の拡がりに関係し

ています。ここに一つのスペクトラムがあるとしましょう。一方の端には無神論があります。その次には宗教一般といいますか、有神論の部分があります。それからキリスト教という特定の宗教があり、一番反対の端にはキリスト教内部の特定教派があります。いわば一つの連続帯の中に四つのステージがありますので、それぞれ一つずつお伺いしたいと思います。

マ：なるほど、結構です。

森：まず、第一のステージですが、アトキンズ教授は、科学というのは客観的で公的で誰の目にも明らかで追試ができるのに対し、宗教というのは単なる私的な感情にすぎないから信頼できない、と論じています。これを聞くと、「無神論」と「キリスト教」の対話というよりも、むしろ「自然科学」一般と「人文科学」一般の対話のように聞こえるのですが。

マ：おっしゃる通りですね。わたしが見るところでは、アトキンズ教授の問題は、非常に単純化された科学観をおもちだということです。科学は実験により答えを出すといいます、彼は科学がそんなに単純ではないことをよく知っているはず。事実の解釈には複数の答えがあり、どれが正しいかは単に実験で決められることではありません。彼らの科学理解はほとんど19世紀的な実証主義のそれで、20世紀のものを読んだことがないようです。わたしが問いたいのは、たとえば人生の意味を実験によって決めることができるかどうか、ということです。もちろんできませんし、彼らもそれは認めています。われわれが問う問いの中には、自然科学だけでは解決できないものがある、という点については、意見の違いはありません。

森：そうですね。

マ：具体的な例を挙げてみましょう。善とは何か。それをどのように追求するか。これは科学の問いではありません。しかし、それが大事であるということは、この対談を読むすべての人が認めるでしょう。ジョン・ポーキングホーンをあなたもご存じでしょう。彼が常に言っているのは、科学はみずから答えることのできな問いを生み出し続けている、ということです。アトキンズ教授のは、とても誇張された科学万能論です。それはこち

らが問い糺さないといけません。

森：わたしもそれにはまったく同感です。科学は価値の判断をすることができない、ということは科学的に証明されている、と言うべきでしょう。

マ：まさにその通りです。

森：もしそうだとすれば、こうした議論に対して、われわれは人文科学の他の領域の人々とも共同戦線を張ることができるのではありませんか。哲学者や文学者、芸術家や歴史家などと。

マ：いやそればかりでなく、実は科学者たち自身も参加してくれます。ドーキンズやアトキンズは、科学の正当な代表者ではない、という科学者たちが多いと思います。

森：なるほど。そういう声も実際に上がっていますか。

マ：はい。科学者たちがあの二人に対してそう言っています。

森：それはとてもよい兆候ですね。わたしも自分の学生に、ブルンナーの「出会い」について話します。ギリシア的な永遠で普遍の真理ではなくて、「出会い」として「起きる」聖書的な真理解のことです。

マ：そうですね、「出会い」(Begegnung)です。

5. なぜキリスト教か

森：さてしかし、次のステージですが、「無神論に反対する」ということは、必ずしも「キリスト教に賛成する」ということにはなりませんよね。

マ：実にその通りです。

森：わたしはちょうど今、ピーター・バーガーの『懐疑論者の信仰告白』という本を訳しているのですが、この本は無神論や懐疑論から宗教への一歩を歩み出させるのにとても有効です。ただ、それ以上へは連れて行ってくれません。つまり、宗教一般ではなくて、キリスト教となると、やはり「特殊性の躓き」(the scandal of particularity)を乗り越えなければならなくなってきました。そこでお伺いします。なぜ「キリスト教」なのでしょう。

マ：よい質問ですね。まずその「特殊性の躰き」という言葉から始めましょうか。これは啓蒙主義の思想家たちに由来するものです。

森：レッシングですね。

マ：そう、彼がとてもよい例です。その前提は、人間には普遍的な理性というものがある、理性で知ることができるものなら何でも万人に共有される、という考えです。その後の知識社会学の成果から、こういう前提がそもそも通用しなくなりました。合理性の概念や、善の概念もそうですが、それらは実際には文化や歴史により形成されたものです。ということは、面白い話ですが、啓蒙主義という現象自体が、実は非常に特殊なものだった、ということなのです。それはまったく自民族中心主義です。

森：核心をついていますね。

マ：だからわたしはそれをまず問い直したいのです。もちろん、特殊性から出発した問いでも、普遍性をもつことはあります。では、なぜキリスト教なのか。わたしが強調したいのは、キリスト教の知的な魅力です。キリスト教は、われわれの世界を意味あるものとして理解させてくれます。他宗教の存在を含めてです。だからわたしにとっては、キリスト教信仰は複数の根拠をもっていると言えます。知的根拠、経験的根拠、それに歴史的根拠です。これらみなが一気に編み合わされています。

森：どういうことでしょう。

マ：時間がないので、一点だけ申します。キリスト教は、他宗教の存在を合理的に説明することができるのです。彼らが正当にも求めていることは、キリストにおいて成就している、とすることができます。もちろんこれは、尊大な優越意識から言っているのではなく、人間が共通に希求していることを尊重した上でのことです。「われわれは、あなたが求めている神の知恵のことをよく知っています。それを見つけるには、別のところに移った方がよいと思います。」と言うことです。実はこれは、初代キリスト教が「キリストはロゴスでありノモスである」と言った時に、あるいは「キリストは律法の成就である」と言った時に、前提されていた新約聖書の考えです。こう

いう考え方が他宗教を尊重する対話と宣教に基盤を提供すると思います。

森：「ロゴス・キリスト論」がですか。

マ：はい。このロゴスは、古代の哲学者にもあったし、プラトンやアリストテレスの思想にも表れていた、ということです。つまり、彼らは間違っていたのではない。愚かだったのでもない。彼らが求めていたものは、このキリストにおいて完全に啓示された、ということです。パウロのアレオパゴスでの説教を思い出してください。「あなたがたが知らずに拝んでいるものを教えてあげよう」という一節です。これが、近代のあのエディンバラ宣教会議でも前提されていた考えです。

森：ええと、1910年でしたか。ジョン・R・モットの話ですね。

マ：はい、そうです。キリスト教を信ずるにはいろいろな理由があり得ます。それは個人に強いアイデンティティを与えるでしょうし、苦難の時には慰めを語ってくれるでしょう。でも、少なくともわたしにとって、キリスト教はこの世界を意味あるものとして説明してくれる力が、他の何よりも大きい、ということが大事です。C・S・ルイスは、「わたしは太陽が昇るのと同じようにキリスト教を信ずる」と言っていますが、それは「太陽そのものが見えるからではなく、太陽によってすべてのものが見えるようになるから」なのです。わたしにとって、キリスト教は知的な太陽です。それによって世界を見渡すことができるようになるからです。他の何よりも、キリスト教はわれわれに世界を見る力を与えてくれます。

6. 現代スピリチュアリティの位置づけ

森：ロゴス論のところはやや留保を残したい気がします、次へ進みましょう。第二のステージには、宗教一般がありました。あなたは最近『キリスト教の神秘主義』について本を書いておられ、その中で、スピリチュアリティの興隆のおかげで、無神論はもはや流行遅れになり、黄昏を迎えている、と語っておられます。とりわけ、アメリカのニューエイジ運動の

ようなものは、若年層に人気がありますが、日本でも霊界だの予言だのがとても流行っています。けれどもそれらは、必ずしも若者たちに薦めたいとは思えるものではありません。「スピリチュアリティ」は、はたしてキリスト教信仰の味方なののでしょうか、それとも敵なののでしょうか。われわれの助け手でしょうか、それとも妨害者でしょうか。

マ：そうですね、答えは両方とも少しずつ、というところでしょうか。無神論とキリスト教との間には、何だかよくわからないけれど、何かこの見える世界を越えたもの、スピリチュアルなものがある、と人々が感じる領域があります。彼らは正しい方向を向いているのです。一步を踏み出したところなのです。初期のキリスト教もそのことを知っていました。プラトン主義者もストア派もエピクロス派も、方向は正しいのですが、まだまだ先へと進まなければならない。だから教会は、その彼らの長い旅路を助けてあげられる、と考えたのです。

森：ずいぶん長い道のりですね。

マ：はい。だから今日でも、教会が問うべきなのは、どうやって彼らを助けたらよいか、ということです。

森：第二のステップのことですね。

マ：その通りです。多くの人々がこのステップを通ることが経験的に知られています。だからその旅路を助けなければなりません。それが彼らを尊重することであり、かつ同時に、彼らの求めているものがキリストにおいて成就していることを伝えることでもあるのです。

森：ちょうど、パウロのアレオパゴスのようにですか。

マ：はい。C・S・ルイスのように、とも言いましょう。

森：ああ、パウロはアレオパゴスであまり成功しませんでしたからね(笑)。

マ：まあそうですね。でも、パウロは彼らを尊敬しつつ宣教する方法を示してくれました。

森：ただ、無神論から来た人は一步前進と言えるでしょうが、逆にキリスト教から来ると、一步後退なのかもしれません。アメリカでも日本でも、

「自分は宗教的ではないが、スピリチュアルなものは認める」という人が多いからです。日本でも、洗礼を受けて数年すると教会を「卒業」してしまうクリスチャンが多くて困っています。教会が彼らを支え続けることができないのです。

マ：ここでちょっとペンテコステ派についてお話する必要があるかもしれません。彼らは近年とてつもなく成功しており、若者たちに受け入れられています。なぜでしょうか。それは、彼らが聖霊との直接のつながりを強調するからだと思います。つまり、スピリチュアルな部分が多くて若者を宗教へとつなげているのです。ペンテコステ派は、スピリチュアルであることと、宗教的であることとを上手につなぐことのできる橋だと思っています。

森：そうですね。

マ：たしかにペンテコステ派から主流派教会への転出は短期的には少ないでしょうが、彼らは多くの若者たちを引きつけています。わたしたちはこれをよく考えないといけません。

7. 特定教派へのコミットメント

森：その関連で、もう一つお尋ねしたいと思います。宗教スペクトラムの一番端にある「教派」のことです。あなたは英国教会の牧師で、さきほど昼食の席で伺ったところによると、礼拝の説教もよくしておられるとのこと。あなたはどの程度ご自分の教派にコミットしておられますか。英国ではあなたの教会は伸びていますか。主流派教会はどこでも軒並み下降気味ですが。

マ：統計によると、英国では伝統的な形態の制度はどれもみな衰退しつつあります。世俗組織でも教会でも同じです。キリスト教が衰退している、というわけではありませんが、教会出席率は落ちています。

森：ということは、人々は行先を変えた、ということですか。

マ：はい。でもあなたの最初の質問に戻りましょう。わたしは英国教会は

キリスト教をしっかりと体現していると思っています。わたしは其中で働くのが快適ですし、自分はそれに貢献できるとも思います。だがしかし、それは英国教会が他の教派よりも優れているということではありませんし、わたしが他教会のために働くことを妨げもしません。自分が仕えようとする教会は、やっぱり自分にとっていちばんよいと思う教会でないといけません。

森：ではあなたは、ブルンナー的に言うと、英国教会と「出会った」ということでしょうか。

マ：そうですね、そう言えると思います。出会いの後の経験も、これまでとてもよいものでした。それでも、これが最良の教会だとか、これが唯一の教会だとか言うつもりはありません。わたしはこの教会に喜んで仕えたいと思いますし、他の人は他の教会に同じように仕えるのだらうと思います。

森：もしかすると、別の出会いがあれば、アリストアー・マクグラスがバプテストであったという可能性もあったのでしょうか。

マ：それはきわめてあり得た話ですね。でもそうなったとしても、わたしは開かれたバプテストになったと思いますよ。

森：わかりました。では、その同じ論理を、他宗教にも拡げる用意はありますか。

マ：いいえ、そうは思いません。わたしは無神論者からキリスト教徒になりましたが、その時ずいぶんいろいろと読みました。仏教もイスラム教もです。でも、それらはわたしがキリスト教に見出したような知的性格をもっていないように思いました。もちろんこれは、仏教やイスラム教が知的でないということではありません。彼らのシステムでは、わたしが問うた種類の問いに答えが出なかった、ということです。世界にはいろいろな太陽がありますが、いくつかはむしろ月のようで、薄明かりのような光を放ちます。わたしにとっては、キリスト教の光がいちばん明るかった、というだけです。

8. 悪の存在と神義論

森：第一部の最後の質問は、悪の問題、ないし神義論の問題についてです。マックス・ウェーバーを読みますと、20世紀初頭のドイツですら、労働者階級の人々が信仰をもてない最大の理由は、教義や奇跡ではなく、神の不正義の問題なのだ、と書かれています。悪の問題は、それほどに深刻です。今日の世界はさらに9.11を経験しました。あの旅客機の乗客の一人がテロリストに乗っ取られた飛行機を墜落させた時、後でそれを知った妻が「彼は神の道具となって働いた」とコメントしています。それを受けて、ドーキンズはあなたに噛みついてますね。「なぜ神はそんな回りくどいことをするのか。もっと前にテロリストに心臓麻痺でも起こせばよかっただろうに。」つまり、神はそもそもそんな介入などしないのだ、ということでしょう。それに対してあなたは、「遣された妻があのように考えることは当然だ」と答えておられます。ここには奇跡について非常に興味深い議論が含まれている、とわたしは思います。なぜなら、すべての奇跡にはその当事者の実存的な報告が含まれているからです。それは、わたしでもあなたでも彼でもない、あの妻だけに妥当する奇跡の報告なのです。

マ：その通りです。彼女はそうやって夫の死に意味を見出そうとしているのです。ですから、ドーキンズの議論はまったくばかげています。彼は、『遺伝子の川』という著書の中でこう言っています。われわれは、ダーウィンの世界に住んでいる。そこには何の善も悪も目的もなく、ただ盲目的で無関心な出来事の連鎖しかない。たとえば火山が噴火して六百万の人が死んでも、それがどうした、というだけです。それで終わりなのです。無神論は、苦難が起きるのを防ぐわけではなく、そこにわれわれが意味を見出そうとする枠組みを否定しようとするだけなのです。

森：なるほど。

マ：わたしはときどきこう考えます。もし今夜、世界のすべての人が神を信じるのをやめたら、悪が起きるのを防ぐことができるだろうか。そんな

ことはありません。ここでもC・S・ルイスを引用したいと思いますが、あなたがとんでもない悪を見たならば、「こんなことは間違っている」と叫びたくなるでしょう。ルイスが問うのは、その感情がいったいどこから来るのか、ということです。どうしてわれわれはその時、「ああ、それが物事の自然な道理というものだ」と言うだけで満足しないのでしょうか。ルイスは、アウグスティヌスに依拠しつつ、この感情こそ、われわれが世界をよりよくしようとする意志の源泉となり、かつこの不完全な世界とは別のもっとよい世界があると信ずる理由になっている、と論じています。この感情は、神がわれわれに備えられたものです。

森：わたしの理解では、ドーキンズのような考えは、彼自身の主張とまったく逆で、人間に与えられた理性の能力、つまり不条理な現実を前にして、それに何とか合理的な説明を与えようとする能力の行使を否定しています。

マ：まったくその通りです。心理学者たちの議論も同じことを示しています。人間は、不幸なことが起きても、それに何らかの意味を見出すことができれば、堪え忍ぶことができる。ほんとうに耐え難いのは、そこに何の意味も見出せない時なのです。だから無神論者の議論は、実際のところ見かけよりもずっと表面的で薄っぺらなものなのです。

森：ありがとうございます。わたしもそのことを学生たちに教えたいと思います。自分に見えることの彼方に何かを想定することは、人間に本性的な能力の発揮です。何かの限界を知る、ということは、その限界の向こう側に何かが存在する、ということを知ってこそ可能です。こういう自己超越の能力に、人間の尊さがあると思います。無神論では、人間のこの能力は十分に発揮されません。

マ：同感です。

森：われわれの大学には大学墓地がありますが、そのすぐ隣に日本共産党の墓地があるのです。彼らは公には無神論者ですから、お墓といっても宗教色を出すわけにはゆかない。でもお墓ですから、何かそれらしいものが

ないと格好がつかない。それで彼らは、大きな岩をもってきて、そこに「不屈の闘士、ここに眠る」と彫りつけてあるのです。無神論者でも、人間の死について、何らかの宗教的な意味づけをしなければならない、ということです。

マ：それは面白いですね。

9. 有機的神学者の「権威」

森：さて、だいぶ時間が経ってしまいましたので、第二部に移りたいと思います。日本とアジアのキリスト教の将来についてです。実はわたしはちょうど先週、韓国での学会から帰国したばかりです。韓国のキリスト教の姿を見て、ずいぶん考えさせられました。日本の教会と較べると、都市部でも農村部でも韓国の教会はとてもしっかり根づいています。

マ：わたしもそう聞いています。

森：あなたは、ご著書『キリスト教の将来』の中で、グラムシの「有機的神学者」(organic theologian)という概念に触れておられます。あの概念は、「祈りの法は信仰の法」(lex orandi, lex credendi)という伝統的な概念と重なるように思います。わたしの理解では、神学は歴史的な学問です。哲学と異なり、神学は人々の実際の信仰とまったく無関係に空中に理論を作り上げることはできません。神学は、現実の信仰共同体の祈りを正統的な信仰へと形にしてゆく作業です。だから神学者は、「有機的神学者」であり続けねばならない。こういう風に考えてよろしいでしょうか。

マ：それはまったくその通りです。わたしがあの概念で強調したかったのは、神学が大学の学問としては大切かもしれないが、一般の信徒の信仰と関係のないところで論じられると貧相になる、ということです。神学は、実際の人々の礼拝や祈りへと結びつくしかたで論じられる時、もっとも輝いて力を発揮します。

森：神学がたんに正しいというだけでなく、実際に生きられるものになる、

ということですね。

マ：そうです。カントやヘーゲルが絶対者について正しく語ったかどうかを論ずることはできるでしょうが、それはわたしの人生にあまり影響しません。でも、神が存在するか、その神はわたしを愛しているかどうかを論ずるとなると、わたしの人生すべてが変わってきます。だから神学は、信仰の脈動を感じ続けていることが大事なのです。

森：わたしはそれが「権威」だと思います。「権力」と違って、「権威」はいつも下から与えられるもので、人々がおのずと納得してしまう力です。だからそれはいつも自明の力なのです。イエスはそういう権威をおもちでした。彼が語れば、別に誰かの後ろ盾を必要とすることもなく、誰の目にも彼の権威がおのずと明らかなのです。あなたご自身も、英国教会の神学者として、その信仰共同体の中から生み出されてきた「有機的神学者」ですね。

マ：そう言ってよいと思います。

10. キリスト教のアジア的表現

森：もしそうだとすれば、アジアや日本の教会も、同じようにわれわれ自身のうちから、自分たちの信仰を表現するための神学者を生み出さねばならない、ということでしょう。アジア神学や日本神学の問題です。それで、わたしの次の質問につながるわけですが、あなたはご著書の中で、「世界キリスト教協議会」(WCC)とそのエキュメニズムが、かつてはシンデレラのような美しい存在だったのに、今やまったく魅力を失って暗い裏通りに落ちぶれている、と書いておられます。

マ：そうですね。彼らの無定見なりベラリズムがその神学をつまらないものにしてしまっているのです。

森：その代わりに伸びつつあるのは、パラチャーチというより新しい福音主義である、というご理解ですね。この福音主義は、たんにプロテスタン

トだけでなく、ローマ・カトリックや正教会も含む、全世界的でそれこそエキュメニカルな運動です。ところで、アジアには、非正統的で多少怪しげなキリスト教の形態もたくさん見られます。たとえば、道教の概念や陰陽論を使って三位一体を表現し直す試みなどです。それらは、とても奇妙に見えます。でも、考えてみると、これまでの神学は、イギリスでもドイツでも、宗教改革者たちであっても、さらには初代教会であっても、みな結局は同じように、それぞれの文脈の中で信仰と神学を表現してきたのではないのでしょうか。

マ：たしかにそうです。

森：しかも、言語はそれによって語られる内容を規定します。もし初代のキリスト教徒がギリシア語で考えていたならば、その彼らが定式化した根本的な教義もまた、ギリシア的な文脈の存在論などを前提していることでしょう。それは普遍的ではありませんし、少なくとも現代の日本人になじみの深いものではありません。ということは、たとえ現代のアジア神学が道教だの陰陽論だのを使って表現する三位一体論も、実はそれと同じことをしているだけで、同じだけの妥当性をもつことになるのではないか。

マ：なるほど。お答えしたいと思いますが、きつとずいぶん長いものになるでしょう。どうぞ後で編集してください(笑)。キリスト教の歴史を見ると、何世紀にもわたって、新約聖書の告げていることがどういうことか、神とは誰か、キリストとは誰か、を理解するために人々が努力してきたことがわかります。それらはずいぶん手近な文化から利用できる材料をもらい、世俗の文化との対話のうちにやられてきました。やがてそういう努力が実り、教会は信仰の表現を獲得するに至りました。彼らの使ったギリシア哲学は、そのための基盤なのです。それを他のものと代えることもできましようが、わたしの見るところ、それらは新約聖書自身に内在しているように思います。彼らの関心は、信仰の表現を自分たちとは違う文化に住む人々に理解してもらおうことでした。その後のキリスト教史でも、同じ努力が繰り返されています。たとえば8世紀・9世紀のイギリスでも、キリス

ト教とアングロ・サクソン文化の融合が起き、文化的な英雄神話がキリストに置き換わって、その人々に聖書的なキリストの意味を理解してもらえようになったのです。これは今日でも続いているプロセスであり、旅路です。ひとたびどこかで行われたらそれで終わり、ということではありません。

森：あなたの議論は、今とてもよい方向に進んでいます。

11. 神学の継続的実験と歴史的検証

マ：ですから、神学者のつとめは、常に新しいアプローチを求め、それぞれの文化から必要な要素を借用しつつ、自分の時代にもっともふさわしい表現の方法は何か、ということを探ね続けることなのです。文化によって福音を理解するばかりでなく、文化に福音を理解してもらうことが大事だからです。だから、今韓国や日本や中国の一部で起こっていることは、それと同じ知的な巡礼のプロセスなのです。たとえば日本人として、自分はどうのようにこの文脈の中で信仰を表現し、理解してもらい、成長させることができるか、を考えねばなりません。その過程では、ときに誤った方向へと曲がってしまうこともあるでしょう。でもそれが誤っているということは、その道を実際に辿ってみてはじめてわかることです。アジア神学も、そういう実験的な探求の一端であると言えると思います。そのうちいくつかは、後の時代に正しくなかったと判断されることになるかもしれません。でもまだそれはわかりません。その点で、ヨーロッパのキリスト教は、すでに自分の辿ってきた道を振り返ることができるだけの長さをもっています。

森：われわれはまだ後ろを振り返るほど長くはそういう経験をしていない、ということですね。

マ：はい。だからアジア神学の実験は、初代教会の歴史の再現なのです。その一部は、文化に妥協しすぎていたり、逆に文化に理解してもらえな

かったり、ということが明らかになってゆくでしょう。その中で、何世代もかけて、やがて将来の人々が、福音に忠実であり、かつアジアにも忠実であるような表現を見出すことになるでしょう。それは、われわれ西洋の人間が代わりにやってあげることのできない実験です。お手伝いはできますし、対話の相手となることもできますが、これはアジアの人々が自分の手で進めなければなりません。

森：わたしも同感です。神学の最前線には、一種の緩衝地帯 (buffer zone) が必要です。そこでさまざまな実験が行われるわけです。何世代も後になって、われわれはそのうちのどれがより正しい表現であったかを見極めることができるようになるでしょう。ただし、もう一度ここで、現在を時間軸でなく水平に見てください。今日われわれの世界には、異なった文脈から異なった神学が無数に生み出されています。われわれは、それらを通してある一つの共通の信仰の群れに属している、ということをごのようにして知ることができるのでしょうか。それとも、そういう統一的な「キリスト教の本質」をどこかに探し出そうとすること自体が、このポストモダンの時代にはすでに時代遅れの理念にすぎないのでしょうか。

マ：うーん、それは非常に難しい問いですね。さきほど神学がそれぞれの信仰共同体の中から生み出されることを話しましたが、それが重要になってくると思います。信仰表現のテストというものは、大学の研究室で行われるものではありません。それは、現実のキリスト教徒たちの礼拝や祈りの実践と結びついています。それが一般のキリスト教徒に理解してもらえるかどうかです。あなたのおっしゃることはまったく正しいと思います。地上に存在したどれか特定のキリスト教の現実を指さして、「これがキリスト教の本質だ」と言うことはできないでしょう。たとえば「17世紀のピューリタンが正しい」などと言うとすれば...

森：いや、わたしはそれで特に困りませんが(笑)。

マ：まあ、あなたにはそうかもしれませんが、全世界のキリスト教徒がそれをいつも真似しなければならぬとすれば、これは困ったことになりま

す。たしかに、彼らは助けにはなりません。でも絶対的な答えを出してはくれないでしょう。

森：冗談はともかく、その通りですね。

マ：その代わりにわれわれができるのは、自分が日曜日ごとに出席している教会よりも大きな信仰の家族がある、ということを確認ことです。たんに共時的にばかりでなく通時的にも、つまりずっと使徒時代に遡るまで、世界の連綿としたキリスト教の伝統に自分も連なっている、という自覚をもつことです。わたしたちは、この偉大な伝統の中で、アウグスティヌスに学び、アタナシウスに学び、そうすることで自分たちの歴史を過去の歴史と結びつけてゆきます。そのような学びのためには、何らかの基準も必要でしょう。わたしは、イギリスに住む一人のキリスト者として、こんな風に言おうと思います。「それぞれの違いを尊び、本質的なところでは一致を、非本質的なところでは敬意をもって異なる意見を。」歴史の中でいちばん悲劇的なのは、周縁的なことを本質的だと言い張って対立することです。

森：ピューリタンとアングリカンの間に起こった祭服論争みたいに。

マ：まさにそれです(笑)。

12. アジア神学の重層的性格

森：では、最後にもう一つ質問させてください。神学者のC・S・ソンをご存じでしょう。彼は非常にはっきりした口ぶりで、アジアの神学は西洋から独立しなければならない、と言います。二千年の神学の伝統で培われてきた概念や用語を捨てて、アジアはアジア的な神学を一から組み立て直さねばならない、というのです。彼にとっては、パウロすらイエスの素朴な福音を神学化してしまった元凶です。もちろん、このようなイエスとパウロの対立図式は、ソンが始めた主張ではなく、一世紀前のドイツ神学者たちがしばしば論じていたことですが、わたしはこのような彼の主張についてゆくことは難しいと感じています。

マ：なるほど。

森：先日エディンバラ大学から出ている *Studies in World Christianity* 15 (2009) に論文を書きましたが、神学という学問は歴史の積み重なりの上に立っているもので、キリスト教のアイデンティティは重層的に発展してゆくのだと思います。ギリシアの初代教会、ローマ的な中世、ドイツ的な宗教改革時代、ヨーロッパ的な啓蒙主義の時代など、それぞれの歴史を通じて、キリスト教の歴史は積み上がってきました。アジア神学は、その上に自分のキモノを羽織ることはできても、それらをすべて脱ぎ捨てて一枚だけ着直すということはできません。それらを前提した上で、何か新しいものを付け加える、ということしかできないのではないかと思うのです。

マ：はっきり申し上げます。実のところ、C・S・ソンは、西洋神学の権化です。

森：よくぞ言うていただきました(笑)。まったくその通りなのです。

マ：というのも、彼は神学がなつてはいけないうものを示しています。つまり西洋の神学です。ということは、彼はやっぱり西洋の神学を基準として考えているのです。アジア神学は、自分で自分の神学を定義すべきでしょう。たとえばわたしはイギリスの神学者として、「ギリシア化」は間違いだ、と言うこともできます。しかし、どうしてそう言わねばならないのでしょうか。そうではなく、神の恵みにより、キリスト教はこれらの道を通ってきた。それぞれの時代にそれぞれの人々が貢献をし、その中から、当時の限定された背景にのみ妥当するものと、現代のわれわれにもなお有効なものとを区別しながら取捨選択することはできます。過去の歴史をひとまとめにしてドグマチックに捨て去るのではなく、自分がその一部となる特権を与えられた歴史を喜びをもって眺めることができるのです。

森：歴史神学ですね。

マ：そうです。わたしの歴史神学者としての任務は、それらの過去の遺産を見て、最良のものを選び、それを現代に生かす、ということです。ただそれは、わたしの判断なので、アジアの神学者が別の判断をするというこ

とは、大いにあり得るでしょう。アジアの神学は、これまでのキリスト教の歴史を無批判に受け入れることも、また無批判に斥けることも、してはならないと思います。こう言いましょ。「過去を批判的かつ積極的に活用せよ」。中にはよいものもあれば、そうでないものもあるからです。あなたのご論文を楽しみにしています。ところで、ソンは台湾人ですか。

森：はい。

マ：彼の神学には過去のドイツ神学の悪い点が出ていますね。ドイツ的な考え方だけ、あるいはイギリス的な考え方だけが正しい、という決め方です。新約聖書からモットーを一つ取り上げておきましょう。第一テサロニケ書の5章にあるパウロの言葉です。「すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。」わたしには西洋の神学の良いところは見えますが、そうでないところは、あなたがたの方がよく見えるでしょう。それを教えてください。そうすれば、あなたがたは私たちによりことをしてくれるわけです。お互いがお互いを助けるわけです。

森：それはとてもよい締めくくりの言葉ですね。長い時間ありがとうございました。

(2008年10月15日)

附記：本稿前半部の要約は、「Ministry」創刊号(キリスト新聞社、2009年)に掲載される予定である。